
魔術の物語 ~ Invincible Power and Formula Grimoire.

DK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵と魔術の物語 } Invincible Power and Formula Grimoire .

【Nコード】

N4699V

【作者名】

DK

【あらすじ】

いろいろ無敵チートな能力を持つ少年「大原正一おおはらしんいち」と魔法と陰陽道を操る（ハイブリッド）少女「神原琴美かみはらことみ」

修学旅行中のある日、旅先で立ち寄った古本屋で正一は分厚い怪しげな本を

漫画と間違えて買ってしまふ。その正体は、少女として実体化できる術式書だった

その日以降、正一と少女、琴美は様々な出来事に巻き込まれていく。
そんな二人が繰り広げる物語。二人の運命や如何に（笑）

いろんなネタを含有している（かも）。

亀更新です。

駄文ですが。見ていただけたら幸いです。

10/20 追記：アカウント持ってないけど感想書きたい。という方はこちらからどうぞ。 <http://bit.ly/ozN103> メールフォームの設定がおかしくなっていたので作り直しました。申し訳ありませんが、今まで書いてもらった感想は受信できておりません（；；；）

始めに（+キャラ設定）（前書き）

友人の指摘によりキャラ設定を整理。

始めに（+キャラ設定）

「無敵と魔術の物語 Invincible Power and Formula Grimoire」
いろいろ無敵な少年「大原 正一」と
魔力と霊力を持つ（ハイブリッド）少女「神原 琴美」が繰り広げる
冒険とかの物語。いろんなネタを含有している（かも）。
そんなこんなですけど許してください。
文才ない？仕様です。

とりあえず最後まで書くつもりですのでよろしくお願いいたします。
> i 2 8 6 4 4 — 2 3 <
以下キャラ設定ですので、初めて読む人は見ないことをお勧めします。

4

おおはらの
大原 正一

性別：男

種族：人間

年齢：16

好きなもの：三度の飯、特にそばとうどん

嫌いなもの：極端な味のもの

能力：有と無を司る程度の能力

「有」と「無」のつくものならなんでも操れるが例外がある。

それは、「自分に対しての干渉はできない。」

傷を物質的に治すことなどはできるが、運や体力などには干渉できない。

性格：極めて温厚。だが怒ると火砕流並に煮えたぎる。

世話好きでもある。だが恋愛に関しては非常に疎い。

かんばら
神原 琴美

性別：女

種族：式神

年齢：女性に年齢を聞くの（ry 外見は16歳くらい

好きなもの：かわいいものと正一

嫌いなもの：怖いものや虫。真つ暗な所。

能力：ありとあらゆる術を操る程度の能力

文字通り、魔術だろうが陰陽道だろうが、術式なら何でも発動できる。

ただし正体は魔導書に貼られた式神であるため、

魔力がなくなると身体が維持できなくなってしまう。

回復魔法などを用いて正一の体力回復などを行ったりする。

なお、この能力は魔導書の中の知識のおかげである。

性格：基本的にはいつも笑顔だが、恋愛が関わってくるとヒートアップしてしまう。

正一に封印を解いてもらったことと、その性格に惚れてしまった。

生まれつき孤独であるため、本当は寂しがりである。

また照れ屋なため、あまり人前で話すのは苦手である。

怒ると般若のごとくになるらしいが詳細は不明。

リラ＝オトネポス

性別：女

種族：不明

年齢：不明。外見は17〜18か。

まだ謎に包まれている少女。正一たちに目をつけているようであるが…

第1話 平凡生活終了のお知らせ(前書き)

一部口調修正。

第1話 平凡生活終了のお知らせ

「ああ、マジだりい…なんでいちいちこんなやらなきゃいけないんだよ」

平凡な中学三年生、大原正一は、修学旅行に来ていた。飯も旨いし、都会と違って空気も爽やかだ。

だが、歴史的な建造物を調べ、レポートとして提出せねばならない。その箇所は10点にも及び、今日は一日中使ってそれらを訪ねていくのだ。

時期は7月。炎天下で蒸し暑い気候のせいで、正一はひどく不機嫌だった。

「なあ、正一」

同じグループの藤山が話しかけてきた。不機嫌だったのに。

「あ…？」

「…。あ、あそこに本屋みたいなものがあるんだが、寄ってみねえか？」

藤山が差した所を見ると、「本」という看板が目立つ結構古い建物が見えた。

「気晴らしにはなるか。先生にバレねーように行くぞ」

「おう！」

近づいて見てみると、それは古本屋であった。

俺らは中に入り、友人を一人見張り役として店頭に配置させておいた。

いざというときの「戦略的撤退」のためである。

「マジ懐かしいわドラ もんのレア物じゃねえかw」

藤山が興味深そうに漫画を読んでいるが、気にせず

正一はジンプを探していた。

「あ、これじゃないか？」

正一は有名漫画系の棚の近くにあった本を取ると、店のお婆さんに代金を渡した。

「なんかジャプにしては重「先生が来たぞ〜!!」「ヤベエ〜!逃げろ〜」

俺は本をバックにしまうと、まだ漫画にハマっている
自称ド えもんヲタクを引きずって逃げた。

「ああああ俺はドラえんを読み「黙れ」「ふええ…」

その後修学旅行は無事に終わり、正一は帰宅した。アレはバレずに済んだ。

「ただいま」

「おかえり。あとで旅行の話でも聞かせてね」

「あいよ」

俺は階段を上がり、二階の自分の部屋に向かった。
ベッドにバッグを投げ出し、正一は椅子に座った。

「あ、さっきの本読んでみるか」

さて、読んでみるとしよう。

そう思っつてブックカバーを外すと

「Formula Grimoire」

え？

ええええええ

「ジャン じゃねえじゃねーかああああ」

正一はありったけの力で叫んだ。

今更騒いだところで親に見つかるのがオチであろう。
そう考え読んでみることにした。

「さてと開けてみるか。ん？」

正一はあることに気がついた。

書に帯が貼ってあり、それで封がされている。

「めんどくせえな……」

ビリッ

バチイイイイン！

なにががはじけ飛んだ気がした。

そして突然部屋に巨大な魔方陣が浮かび上がった。
光が収まったので見てみると……

「ふぁーああ。あら？封印、解けたのかしら？」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

眼の前には、黒と白を基調とした、

魔術師と陰陽師を足して2で割ったような
そんな服装の少女が現れた。

思えば、これがすべての始まりであった。

第2話 式神少女と能力判明

「ア、ア、ア、ア、ア…アレハユメダキツトユメダハヤクメエサマセオレ」

「むう。さてと、状況確認ですわね。……………えーっと…どうされましたか？顔色が悪いですわよ？」

少女には、正一の脳内回路がオーバーヒートしていることなど解る訳もなかった。

「えっと、じゃあ君…神原さんは、誰にも拾われることもなくあの本屋で眠っていたというのですか」

「ええ、そうですね。封印されている間の記憶はないので」

正一は、考える素振りを見せた後、言った。

「あ、あの、おひとつ伺いたいことが…」

「何でしょう？」

「一体これからどうs「え？ここに住みますけど？……………え？」

しょういち は ふりーず した。

「さすがにそれはd「…ダメなのですか？…うっ」
涙目と上目遣い〓女性の必殺技

このコンビは正一に強烈なアタックをかけたのであった。

正一は両手を上げて降参の意思を伝える。

「わかりましたよ…」

その途端、少女の顔が、パアア、という効果音でも付きそうな位明るくなる。

「これから宜しくお願ひしますわね えっと「大原正一です。正一で結構ですよ」

…………正一くん、私のことも琴美でいいですよ。

あと、普通にしゃべりやすい口調で構いませんわ」

「では…琴美、これでいいか？」

少女は頷く。

「ええ。…私も敬語やめていいですか？」

続いて、正一も頷く。

「では…正一、これからよろしくね」

こうして、琴美との共同生活が始まったのであった。

「そういえば、琴美。お前特技とかあるの？」

「ええ。そうね、簡単にいえば…術、ならなんでも操れるってことかしら」

「すげえな」

「名前は、「術を司る程度の能力」といったところかしら」

「（突っ込んだら負けだ…）…お前人間？」

「正一ったら…乙女になんて酷い事を…」

琴美はヨヨヨと泣き崩れる。無論、嘘泣きであることはバレバレであるが。

しかしそれすら気づかない正一は若干焦りながら、弁明に努める。

「い、いや、そういうことじゃなくて…種族的に本当に人間か、ってこと」

「…あなたって優しいのね。…式神よ。陰陽道方式で、魔力がエネルギーの特殊な式神」

魔力を使う式神なんて初耳だ。

普通、式神は霊力を媒体に起動する。気でもできないことはないが、ましてや、魔力などもつての外である。

そこまで詳しくはないが、一応基礎知識として知っている。

考えても意味が無いと悟った正一は、軽い冗談を言ってみることに

第2・5話 式神、学校に行く(前書き)

挟む話第1弾です。友人と父の意見を参考にしました(笑)

第2・5話 式神、学校に行く

「さて、もう学校に行く時間か」

琴美は聞きなれない単語に首をかしげた。

「がっこう？何かの教育機関かしら？」

「まあそうだな。社会にでるための勉強と訓練の場と考えてもらっていいだろう」

「ねえ、私も一緒に行っていいかしら？」

「あ……」

簡単に、いいよとは言えない。見知らぬ人に付き添われながら登校なんてしたら、

絶対に怪しまれるだろう。絶対に。

だが、行けないわけでもなかった。

「なあ、お前気配を消す術とか使えるか？」

「ええ、知ってるわよ。貴方以外には存在が感じられなくなる術とか」

なら、問題はあるまい。

「じゃ、行こうぜ」

駅に行き、電車に乗る。

自分が住んでいるのは都心部から少し外れた場所であるため、車内は意外と空いている。

四人がけ席に、二人で腰掛ける。

もちろん、周りの乗客からは琴美は見えない。

ちなみに、琴美が使っているのは、感覚に”フィルター”を掛ける幻術である。

琴美に対しての知覚情報は、全て”濾し取られて””されてしまった”め、

結果として誰にも存在が感じられない。

「電車なんて、本でしか見たことなかったわよ…しかも凄いじゃない」

「これでも普通のローカル線なんだがな」

さて、二人は無事学校に到着した。

今日は夏休み明け初日であるため、やることは始業集会だけである。門を潜ろうとした時、後ろから声がかかった。

「お、正一〜！」

「正くん、お久しぶり」

振り返ると、藤山と、幼馴染である賀茂曜子かもちょうこが手を振っていた。

慌てて返事を返す。

「お、おう」

しかし、突然の言葉に迂闊にも狼狽を隠しきれなかった。

それをみた藤山は顔をニヤリと歪め。

「正一が慌ててるなあ、まさかまさか、彼女でも出来たかア〜？」

「居るわけねーだろっ！〜！」

そして、横にいる賀茂はドス黒いオーラを出しながら微笑み。

「ま、居たら居たでちよつとOHANASHIねえ」

「お前も何気なく恐ろしいことを言うな！」

このままでは胃袋に穴が開いてしまう…

そう考え、正一はとりあえずこの場から逃げることにした。

「あ！お、俺日直だった〜！！先行ってるわ！」

「コラア！逃げんなやア！」

こうして、正一は逃げ出した。

「……よく平気ね。まあ、一般人には当然の反応でしょうけど。それにしても、横に居た”ヤツ”は一体誰なのかしらね…気になるわア……」

一人残された賀茂は、独り言を呟き、口を三日月のごとく歪めたのであった。

始業集会が終わり、教室で一休みしていると、琴美が話しかけてきた。

「・・・なぜか深刻な顔で。」

「ねえ、正一」

「なんだ、そんな真剣な顔して」

「賀茂とか言ったかしたら、アイツは…危険分子よ。私の中級幻術を見破るなんて」

「なッ!? 本当か!？」

「ええ。恐らく、「その道」の人間でしょうね」

琴美は驚愕していた。

あの時、自分がとっさに消えるふりをしなければ、危うく消されるところであった。

なぜなら。

幻術を見破った上、こちらに対して、「眼を使って」、「封印用の結界を貼ろうとしてきたのだ。

普通は、陰陽師は即興でも必ず手で印を組まないと術を発動できない。

だが、彼女は「眼で」それをやってのけた。

そんなことができるのは相当高い技術と膨大な霊力を持った者のみ。初めは、何かの間違いだろうと考えていた。

しかし、琴美は思い出してしまったのだ。

記憶が間違っていないなら、賀茂家は、安倍晴明の師である賀茂忠行の子孫の家系だ。

ならば、無理もない。

そう思い、琴美は動揺しつつ最大限に警戒していたのだった。

それを知った正一はホームルーム後、提出物などを済ませると、転げるように正門を飛び出した。

「そこまでいそがなくてもいいじゃないの!？」

「三十六計なんとやら、だ!急ぐぞ!」

正一は家に大急ぎで帰ったのだった。

「今日は散々だったな…」

「あそこは超能力開発機関か何かなの!？」

「ちげーよ!？それにしても曜子、か…」

二人は、そろって首をかしげたのだった。

第3話 抱き枕と異世界への転移

正一は翌朝、いつものように朝日で意識が覚醒した。意識だけが起きていて、目はまだ開けていない状況である。それだけなら普通の朝である。

しかし正一は身体に違和感を感じた…否、身体の「感触」に、だ。

「暖かくて、柔らかい…」

そう、背中の中の肩甲骨のあたりが柔らかく、胴に帯を巻かれたような感触がする。

そして暖かい。

ここまでの思考時間、2秒。

正一は、目をぱちちりと開けた。

見慣れた部屋の天井が映る。

そして、顔を横に向けると。

「やっぱりな…」

そう、琴美が自分を抱き枕のようにして抱きついて寝ているのである。

背中に当たっていたのは…ある脂肪の塊であった。

(耐える俺の理性……!!耐えるんだっ!!)

「んむう……ふあああ。おはよう。」

「お、おお、おい／＼」

テンパッてしまっつてうまく話せない。鉄の理性じゃなかったのか。

「何?」

「な、なんで俺の布団に入ってるんだ？床で寝たんじゃなかったのか？」

「床だと寒いから……というのは建前」

「本音を言ってもらって結構」

すると琴美は少し頬を赤らめて言った。

「貴方と添い寝したかったからよ……／＼……暖かそうだったし。手頃なサイズだし」

「はぁ……」

正一は抱きつかれている手を優しく解くと、朝食を取るため部屋の扉を開けた。

「起こして」

「……はいよ。」

二人は揃って扉を開けた。

そして振り返ると

草原でした。

「（ ）（ ）ポカーン（ ）（ ）」

「ど、どういふことよこれ！」

「俺も知っていてえよ……！……一体全体何なんだ……」

今までであったドアがなくなっている。

「携帯携帯、つと」

取り敢えず、携帯で現在地を確認することに。

「ケイタイ？……ああ、アレのことね」

「ああ。それでどこどこか調べてみる」

しばらく調べて分かった。現実とは無情であった。

「GPS、基地局ともに応答なし。GPSを、全方位、感度最大で検索したが、反応なし。」

つまりこゝ、「俺たちの」地球じゃない。」

琴美は険しい表情であった。

「そう…どうしようかしらね…食料とかどうやって調達するつもり？」

「そうだな……」

正一はしばらく考え、ある結論を導き出した。

「あ、そうだ、能力で朝飯作れるかな」

色々試行錯誤した結果、五分ほどで創造のやり方が分かった。

「よし、やってみよう。『ご飯と味噌汁と焼き魚は、テーブルにセツトされた状態で、椅子と共に、この場に必ず「有る』』」
すると、目の前に、食事が載ったテーブルと椅子が現れた。

「あ、出来たじゃない！！凄いわね……」

「さて、うまくいったことだし、食べてしまおう」

「そうね。食べている間に策も練りましようか。」

正一は改めて深呼吸した。

この世界は、空気が綺麗なようだ。

肺の中に、清々しい空気が入っていくのが感じられた。

さて、対策を考えようか。

正一は、ご飯を食べ始めたのだった。

第4話 赤面少女と共闘初陣（前書き）

どうも。作者のDKです。

久しぶりにアクセス解析を覗いてみたのですが

累計：406アクセス ユニーク：105人

（。。。）

こんな駄文ばかりの小説にお越しいただき、本当にありがとうございます。

感想なんて見つけたら作者が暴走します…

では、どうぞ。

第4話 赤面少女と共闘初陣

「さて、今後の予定についてなんだが（もぐもぐ）」

「ええ、何とかしなくちゃいけないわねえ」

正一は焼き魚を食べ終わると、琴美にある提案をした。

「なあ、ちよつと探索してこないか？暇なんだし（もぐもぐ）」

「そうね、それがちよつどいいわ。…ねえ、あーんして／＼」

やれやれ、と正一はため息を付いてから、

「ほいよ、あーん」

「あーん…はむっ／＼」

琴美はまるでゆでダコの如く真つ赤になっているが、正一は気づいておらず、

すでに思考の海に入っていた。

ここは草原だが、よくよく見ると向こうの方に山がある。

あの山のあたりまで行ってみよう。そこまで行けば人が1人くらいいるかも知れない。

移動手段は飛行でいいか。

よし、そうとなればいろいろ必需品を創造しておかないとな。

あと武器も。念のためだけど。

何にしようかな…

そうだな、アレでいいや。ま、足りなくなったら創造すれば…

あとは、琴美に結界とかを…

思考から戻り、顔を横に向けると。

目に入ったのは真つ赤になりモジモジしている琴美。

「……え？あれ？お、俺なんかしたか！？」

「い、いや、別に、その………嬉しかっただけよッ…／＼」

「………？」

正一はやはり鈍感であった。

しばらくして琴美が落ち着くと、正一は自分の考えを説明した。

「わかったわ。一応術でのサポートをするから。魔力の供給は頼むわよ」

「それくらいなら朝飯前だ。じゃ、行こうか」

そういうと、正一は、能力で自分の動きたい方向への力を身体に付加し、地面を蹴ると、

フツと身体が宙に浮かび上がった。

同時に、琴美に魔力を「無」意識で供給する。すると、琴美も宙に浮かんだ。

「さて、山を目指すとしますかね」

「何も無いといいけど…」

飛行し始めて十分ぐらい経ったときであった。

バリバリバリ

目の前の地面が急に裂けた、直後

「ガルウウウウウウ!!」

「() やっぱりな(ね)()」

何かデカイモグラ(?)の化物が飛び出してきた。見るからに、外見がグロい。

コチラを見つければ、あの足で出せるとは思えないほど高速で突っ込んでくる。

「おー、初陣だな。気を引き締めて」

「私もやるわよ。…魔弾生成、発射！「ソラリスウエーブ」！」
琴美が目の前に紅黄の弾を生成し、放たれた弾幕は波を打ちながら
化物を襲う。

「さて、やるか…自走砲五台生成、自動装填、自動捕捉で一斉掃射
ッ！！」

正一は目の前に自走砲を五台生成し、弾幕のごとく掃射する。
ダダダダダダダダダダ！！

「グオツ！ガアアアア！…」

雨霞のような弾幕を喰らった化物は、シュツ！という音を立てて消え
てしまった。

琴美は、信じられない、とでも言いたげな顔で正一を見ていた。

「す、すごいわね…あんな事ができるなんて…」

「頭にパツとイメージが浮かんできて、その通りにやったんだよ。

お前もサポート、ありがとな」

「どういたしまして」

そういつて、琴美は微笑んだ。

「さて、旅を続けようか」

二人はまた、飛行を始めた。

さて、人はいるのかな…？

第5話 村に到着、情報収集（前書き）

もっつっつのすごく多忙で更新できませんでした…
本当にすみませんでした…m（―）m

では

どうぞ。

第5話 村に到着、情報収集

しばらく飛んでいくと、小さな村があるのが見えた。

正一はものすごい達成感のようなものを感じた。

喜びが沸き上がってくる。

「いよっつしゃあ！人間が居るぞ！！」

「妙に元気そうね…ま、そういう所が／＼」

琴美は頬をすこし赤らめている。何故。

「…そういう所が、何？」

「なな、なんでもないわ」

お兄さんは続きが聞きたかったのにな！。残念だな！。

琴美を半目で見る。

「もう…そんなに見つめないで／＼」

「……………」

どうやら、もう耐性がついたようである。

村の門をくぐると、そこはヨーロッパにありそうな村であった。皆がコチラを凝視してくる。

正一は、まず場所を訪ねようとした。

「あ、あの」

すると、怪訝そうな顔で

「ヴェーア ジントズイー？」

「……………」

（訳分わけからねえ…）

しばらく試行錯誤していると、琴美が提案してきた。

「ねえ、能力で「言語の壁を「無」くせばいいんじゃないかしら？」

「…！それか！よし、やってみるか」

正一は、彼らと自分たちを隔てている壁をイメージし、それを叩き

壊した。

「…あの」

恐る恐る話しかけてみると。

「すみませんが、どちら様で？」

（おおおおおおおおお！通じた！）

「遠い国から旅をしていて、道に迷ってしまいました」

「そうですか、それはお気の毒に」

横に目をやると琴美がガッツポーズ。感謝する、とアイコンタクトを送った。

「…で、お願いがあるのですが」

「は、はい？」

「ちよつと、ここどこですか？」

その後、ここが後のドイツにあたる場所であることがわかった。というか、能力を使った時に差別とか恐怖とかそーいう類も一緒に壊してしまったようだ。

今は村長さんの家でお世話になっている。

庭に出て子供の遊ぶ風景を眺めている。

なんとも微笑ましいものだ。

「可愛いなあ、子供は（ニコッ）」

「…」

「やっぱり子供は愛だ」「ドガッ」「ゴフッ！」

後ろを見ると琴美が、全身から黒いオーラを出しながらうつむいてぶつぶついつている。

あわてて子供たちは家の中に入っていつてしまった。

「こ、琴美？」

「あんな顔、私に見せてくれたこともないのに初対面にどうしてどうつして…」

「あ、あ、あ……なあ、琴美」

「…」

「…膝枕でもしてやろうk」「…ほんと!?!」「あ、ああいきなり顔の形相が変わった。あな恐ろし。

「じゃ、お邪魔しまゝす…ふふふふふふ」

ナデナデ。頭を撫でてやると、琴美は気持ちよさそうに目を細めた。

「フフフ…正一ってほんと優しいのね…」

「怒るのはお門違いだろ」

ハハハ、フフフ、と庭に笑い声が響きあつたのだった。

第5話 村に到着、情報収集（後書き）

作者「第1回主人公vs作者雑談〜！！始まり始まり」

正一「vsてなんだよ」

作者「いやーやつぱチートですなあ。翻訳もいららないなんて」

正一「まーな。でも意外と体力を使うぞ？」

作者「へー。そして琴美さんとは随分仲がよろしいようで」

正一「…」

作者「…なに？黙秘権？存在Deleteするよ？」

正一「サーセンでしたサーセンでした！待って！小説削除しないで
！」

作者「…で？」

正一「なんとというk「私は結構本気よ？ノノ」…え」

作者「ゾッコンって感じですねえ。ま、頑張ってくださいな」

正一「え？おい！おくブツツ」

こんな主人公＋ヒロインですが、今後とも宜しくお願いいたします。

第6話 出発、そして新たなるスタート（前書き）

DKです。一言でもいいので、見てくださった方は感想を書いていただけると有り難いです。変な箇所は修正等するので。

第6話 出発、そして新たなるスタート

それから一週間が過ぎた。

正一は、今日は村を出発し、また探検の旅を再開しようと考えている。

「どうもお世話になりました！感謝しきれません」

「いいんじゃないよ、最近まったく旅人さんが通ってくれなくての。ワシらも嬉しかったんじゃない」

そこで正一は、村長に見えないよう、背中に手を回しボージョレ・ヌーボーを二本創造する。

「あの、良かったら、受け取ってくださいませんか。旅の途中でもらった高級酒ですが」

差し出すと、村長はニヤニヤと、

「おお！すまんのう。ワシは酒に目がなくてな、ハッハッハ」

そう言っつて、村長は近くのテーブルにそれを置いた。

「さて。では、本当にお世話になりました」

「おお。なんかあったら、また来るがよいぞ」

村の門をくぐり、また草原を歩き始めた。

歩き始めて一時間。濃い霧の中をずっと歩いていたのだが。

「何にもないわね……」

そう、さつきから風景が何一つ変わらないのだ。

「ああ…もうちょっと歩いたら休憩するか」

そう言っつて歩いていると、正一の足先に何かがぶつかった。

「おっと。ん？切り株？てことは……」

「森が近くにあるんじゃないかしら？」

そしてしばらく歩くと、やはり森に着いた。

森の中を歩いていると、森の中にベンチがあるのを見つけた。

「ベンチがなんでこんなところに？」

「木こりたちが使うんじゃないかしら？」

二人でそこに腰掛けることにした。

「なんか疲れたわあ……ふあーあ……」

ポフツ

「…勝手に膝枕させるなよ」

「いいじゃない別に。ちよつと寝させて」

「あいよ。俺も寝るとするかな」

正一は気づかなかった。

否、気づくすべもなかった。

この時、二人の近くがうつすらと発光していたことに。

正一は眩しい光で目を覚ました。

「…んー？何なん……………え」

そう。そこはあの濃い霧に包まれた森ではなく、

「ここ俺の家じゃん!？」

ベットの上に居たのであった。

「琴美は…?あ」

琴美は、やはり膝の上にいた。

「おい、おい琴美」

「何よもう……………えええ!？」

「さて、飯でも食つか……………あー」

「何?」

「そついやお前家族にどう紹介すれば……………」

「そつね。うーん…あ!」

琴美はどうやらひらめいたようだ。

「？」

「10秒間、目をつぶってなさい」

「わかったけど、いったいなにする気だ…？」

「いいわよ」

「そうか。じゃあ、行…あれ？なぜお前エプロン姿に？」

「ふふふ。なぜでしょ」

「ま・さ・か…」

「ええ。家族全員に、「私は正一の許嫁^{いいなすけ}」って記憶を埋め込んだのよ

「ブウハアツ！ハア？コラ待て」

正一は反論を試みた。だが

「…ダメなの？」

琴美の最終兵器（涙目と上目遣い）の前に、儂く散ったのであった。

「じゃ、行きましょ」

「お、おい！おま……………アッアッアッアッアッ！！」

琴美は、正一を引きずりながら階段を降りていった。

第6話 出発、そして新たなるスタート（後書き）

最近筆者は多忙です。しばらく更新が滞るかもしれませんが、どうかご了承ください。

あと感想欲しいです。待ってます。

＜閑話＞ 別視点の日常。(1000PV突破記念)(前書き)

1000PVありがとうございました!!

こんな駄文だらけの小説を読んでもうございまして、
心から御礼申し上げます。

今回は琴美視点の日常です。

では、じゃーん。

<閑話> 別視点の日常。(1000PV突破記念)

グラグラ。グラグラ。

身体が突然揺れ、私の意識が覚醒してくる。

(何？もて？)

「おい、朝だぞ、起きろ」

「ふあああ。おはよう、しゅーいち」

まだ頭が完全に覚めていないため、寝ぼけ眼で正一を見つめながら、上半身を起こす。

正一は見つめられてあたふたしているようだった。

「お、おはよう。飯食うか、ってオイ」

ごめんなさい、正一。私は睡魔まらまという悪魔に抗えなかったわ。

ボタン

私は再びベットに倒れた。

「へ？ってうわほへえっ!？」

同時に正一は奇妙な声をあげて倒れた。

「うわあ」と言いたかったのだからうけど。

私が抱きしめてしまったものね。仕方ないわね。

私はそつと、正一に催眠術をかけた。

なんて可愛い寝顔なんでしょう。ホントに／＼

「……………」

「ご、ごめんなさいね…だって添い寝したかったから」

「だからといって昼近くまで寝るか」

「むづ…」

正一は朝ごはんを食べられなかった上に自身まで寝てしまったという

ことに不機嫌なようね…

ちよつとやりすぎだったかしら…

「…もういい。許す」

「ありがとう」

正一はニツと笑った。

「昼飯は冷やし中華でいいか？」

「ええ、お願いするわ」

昼ごはんを食べて、正一は勉強をしている。

「この証明はめんどくさいな…もつと楽なのねえかなあ…」

私はそつと、問題の一文を術で書き換えた。

それは、数学の歴史上の有数の難問として知られるもの。

「これがいいや。えつと…ん？」

『「1」「3」以上の自然数 n について、

$x^n + y^n = z^n$ となる 0 でない

自然数 (x, y, z) の組み合わせがないことを証明せよ』

「…これどこかで見た覚えが。てかこの部分、前見たときは等差数列の証明だった気がするんだが」

ギクリ。

ば、バレたらどうなるんでしょうね…

正一は数学の参考書を取り出した。

「…これだ！コレコレ！「フェルマーの最終定理」だッ！」

ガビーン

「…問題集の文面を書き換えるなど上等じゃねえか。とことん付き合ってもらわねえとなア」

「え、ちよつと「オニイサンニナニカモンクイウキガアルノカナ？」

ん?」「…ひい」

目の前には、阿修羅も引くであろう鬼がいた。

フェルマーの最終定理を最後まで証明させられ、満身創痍の私。

自業自得とはいえども、怒った正一は恐ろしいことを実感させられた。

いくら何でも。私は式神だけど、スパコン並の演算能力はあるけれど、ね。

「30分で解け」っていうのは鬼じゃないかしら…

そんな私におかまいなく、正一はさらなる命令をしてきた。

「なあ、晩ご飯作るの手伝ってくれ」

「私はつかれたわよ」そうかそうか。では新たな問題を解いてもらおう。P NP予想の完全証明でもどうか。「…もう。わかったわよ」

私は抵抗を諦め、とっとと手伝うことにした。

さて、今は就寝の時間だ。

「おやすみなさい」

「おう、おやすみ。今日は一日ご苦労さん」

「へっ?ど、どういたしまして」

もう。正一ったら。自覚もないのに、嬉しい不意打ちなんて卑怯よっ／＼

モゾモゾ

「ん?ってオイ…なぜだ」

私は暖かい、布団におじゃますることにした。

「おやすみなさい」

「オイちよっと待ってって」

私は瞳をゆつくりと閉じた。

ああ。私って幸せものね。

そう思いながら、私の意識はだんだん遠ざかっていった。

< 閑話 > 別視点の日常。(1000PV突破記念)(後書き)

本当にありがとうございました。

ちよっと多忙なので、しばらく更新できなくなるかもしれませんが、これからもよろしくお願ひします。

第7話 再び移転、拾われる鍵（前書き）

今回はややシリアスです。

ノロケありますけど。

第7話 再び移転、拾われる鍵

階段を引きずり降ろされ、いろいろ悲惨なことになった正一はメチヤクチャ不機嫌であった。

「……………」

「ね、ねえ。もう許してくれない？ね、n「なあ」「」

「親しき仲にも礼儀あり、って知ってるか？」

「うぐっ…そ、そうだけれども」

「ああいうことされたら、普通の人間なら死んでるぞ。傷を「無」にしたから良かったが」

「ごめんなさい…」

「…」

「（ウルウル）ごめんなさい…ぐす」

「…反省したか？」

「当たり前でしょう、ぐすっ」

「…わかった。もうするなよ」

そう言つて、正一は琴美を抱きしめた。そして、頭を撫でた。

「ぐす、しょう、いちったら…」

「もう泣くな。そろそろ、各々の仕事を再開するぞ」

「え、ええ」

琴美は涙をぬぐい、料理を再開した。

その後、少し遅い朝ごはんを食べている時。

正一は急に目を細めた。

「ん…？」

「何よ。美味しくなかったかしら？」

「いや、何か、うーん…誰かが見ているような感じが」

琴美は首をかしげた。

「私も誰も見なかったわよ。気のせいじゃないの…?」
返答を聞くと、正一は苦笑した。

「ハハ、お前が言うならそうだよな」

そして二人は朝食を再開した。

「気づくなんて、なかなかやるじゃない。

これでもほとんど気配を隠していたというのに。

もう少し、様子を観察してみようかしら。ふふふ…」

その時、誰にも聞かれることはないつぶやきを漏らし、
口を三日月のごとく歪めた「少女」が、いた。

二人は部屋に戻ると、学校に行く支度を始めた。

そう。琴美は、社会全体の記憶を書き換え、

自分が学校に入学していることにしてしまったのだ。

なんとというご都合主義。

「数学の宿題終わってなかったあ…」

「お前、スパコン並の計算能力でなんでも解けるくせに。いいよな」

「ふふん。どうしても答えがわからないときは、

一から代入して求めることができるわよ」

「は?」

正一は呆けた。

「はいはい。天才児乙」

すると琴美は頬をふくらませた。おお、可愛いじゃないか。

「…むう。わ、私だって万能じゃないのよ…」

噛み合えぬ筈の歯車は、廻り始めた。

第7話 再び移転、拾われる鍵（後書き）

さて、ようやく黒幕、リラ＝オトネポス初登場。
今回から、少し話が急展開します。

リラは、何故あのような言葉を残したのか。
そして、彼女は一体何者なのか。
彼女の目的は、一体何か…

また、次回をお楽しみに。

感想もお待ちしております。

第8話 周辺散策と黒装束（前書き）

一週間ものすごく忙しくて…すみませんでした。
閑話は少し延期します。

第8話 周辺散策と黒装束

「うーん…」

「さつきから唸ってばかりよ…」

二人は森の中で対策を考えていた。

「ここはどこか…どうせまたGPSも使えないような場所だろう」

「そうよね…ん？」

琴美が、何かに気づいたような声を上げる。

「どうした？」

「いや…ね。もしかしたら、って思ってるんだけど…」

琴美は続ける。

「私たちがこの空間に飛ばされた時、その一瞬、何か次元の方向が大きく引き伸ばされるような感じだったのよ。」

「そうか…で、その次元の方向、とやらが引き伸ばされるってことはどういうことだ？」

「そんなこと自然には起こりえないのよ。だから、私はもしかしたらこれって「人為的」な移動なんじゃ…ってね…」

正一は大きく目を見開いた。

「え！？もしそうだったら、そいつはきつとすげえやつだろうな…」

「ええ…ま、ここで止まってもしょうがないし、ちよっとお散歩してきましょう」

「そうだな」

二人は立ち上がって、周りを散策することにした。

「…だけどさ、普通こういうところって…」

ガオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「…やつぱり…」

もうなんか、テンプレ化してる気がするが、来ちゃったものは仕方がない。

琴美は飛び上がり、手で六芒星を描く。

「陰陽結界・斬ッ!!!」

印から無数の刃が飛び、怪物に突き刺さる。

正一も負けずと、指で近代兵器を創造する。

「トマホーク、トライデント、ピースキーパー、一斉掃射ア!!!」

地面が割れそこから砲台が飛び出し、核弾頭を搭載したミサイルが怪物に直撃する。

そして、一瞬で放射能を無効化する。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

怪物はみるみる小さくなって、消えてしまった。

消える際に、一瞬、ユラリと空間が歪んだ。

そんなことにお構いなく二人はほっと息をつく。

「意外とあっけなかつたな...」

「でも、意外と経験にななつたんじゃない?」

「まあな...」

そう言つて、二人が足を踏み出そうとした、その時。

正一は背後に気配を感じ、急に琴美を突き飛ばした。

「危ないッ!」

後ろを見ると、さっきまで自分たちがいた場所にクレーターが。

そして。

「散策中、失礼。せっかくの楽しい機会だが、ちょっと付き合ってもらおうか」

「だ、誰だ!?!」

空中に、全身真っ黒な黒装束の男が浮かんでいた。

「折角の機会を逃す訳にはいかないんでね。まあすぐ楽になるよ、

殺したりはしないから」

第8話 周辺散策と黒装束（後書き）

＼パッパパパーン！

祝・2000PV突破！

本当に…皆さん、本当に有難うございますッ！！

記念に今度何か書こうと思います。

これからも宜しくお願い致します。

第9話 黒装束との決着（前書き）

期末試験という名の拷問の合間にやっと書く時間とれました…
放置してすみません…

第9話 黒装束との決着

「くろいふくのおとこが しょうぶをしかけてきた！」

「君はどこぞやのゲームか」

いかんいかん。集中しないと。

「俺は大原正一だ。お前は？」

「紅桜寺 博文こうおうじ ぶんぶんさ。…じゃ、手っ取り早くいかせてもらつよ。

「Begin Analyze」！！」

男が何やら叫ぶと、空気がビリビリ震え始めた。

「何しやがった」

「手品さ。Analyze Space Energy」…」D

『. One

さあて、シヨ一の始まりさ！」

男は高らかに笑うと、人差し指を前につきだした。

そして、指の先端が輝きはじめた。

（これは危ない！！）

本能がそう叫んでいる。正一はとっさに防御した。

「A・I・B起動ッ！」

エーアイビー
AIB。「[A]bsolute [I]nfective

「[B]ARRIER」

（アブソルート・インエフェクティブ・バリア、「絶対無効障壁」）
の略であり、

能力を黒い壁状に展開することで盾のように機能する。

これを通過できるものはない。

ただ、受け止めたエネルギーの相殺には体力を要するのが欠点である。

「正一：大丈夫なの？」

琴美がそういつた瞬間、男の指が一閃。

太い光の奔流が放たれる。黒い壁に光が衝突し、爆音と共に壁に波紋が広がった。

「クツ：やるじゃねえか」

正一は壁を消すと、男に向かって掌をつきだした。

すると、男の正面に半透明の壁が現れた。

「わざわざやられるような、たちではないのでね。」「Wall S
t r a c t u r e d」

構わず正一は手に能力を集中させる。そして…

「カトプトロン・オブ・ロンギヌス！」

カトプトロン・オブ・ロンギヌス
聖槍鏡像。

正一は輝く聖槍の”鏡像”を手にし、力を込めて投擲した。
ヒュウウウウン！

男は憐憫の目で正一を見て言った。

「君も少しは学習したまえ。そんなんだ」バキッ」ウガアッ！！」
バリアはいとも簡単に破られ、男は貫かれた。

そのまま、地面に礫となる。

そして、妙なビリビリ感も消えた。

「こ、これはあつ…あいつnグハッ」

男はなにか言いかけたが、力尽きて倒れた。
気絶しただけであるが。

「じゃあな、おっさん」

正一と琴美は、また歩き始めた。

正一たちがいなくなった後。

男の横に歪みができ、そこに少女が現れる。

「ずいぶんボロボロじゃないの。だらしないわねえ……」

そう言つて、少女はクスクスと笑う。

「油断……して……しまつ……、たんだ……」

男は胸に槍が刺さつたまま話している。故に長く話せない。

「まあ、外れたら帰つてきなさい」

「く、そつ……、外れ……、ないぞ……」

男は半ば観念しかけていた。

「あ」

「何よ」

「槍消すの忘れてた」

「バカじゃないの!？」

「……よし消えた。これでいいか」

「……紅桜寺さん、ご愁傷様です……」

第9話 黒装束との決着（後書き）

いやーなかなか来れなくて、すみません。

期末試験の合間に書くことしかできないもので。

試験とは以下に嫌なものであるかよく解りました。

引き続き感想をお待ちしております。

次回はクロスオーバーの話を用意してます。

< 閑話 > 友人の友人。 (クロスオーバー) (前書き)

期末試験とか文化祭の準備やら試験やらで更新できる状況じゃありませんでした。申し訳ございません。m(| |)m
さて今回は、友人の山口流氏の小説「巫女の少女と命使いと」とのクロスオーバー話となります。本人から許可がとれましたので。本編とは関係有りません。
では、どうぞ。

<閑話>友人の友人。(クロスオーバー)

眩い光が部屋にさしこむ。正一は目を覚まし、背伸びをした。

「うーん…もう朝か。起きろ」

そう言つて、向かい側のベッドで寝ている琴美を揺らす。

「むう……あさあ？」

「そつだ、起きてくれ」

「はい。……ふぁーあ」

琴美は目をこすると、ベッドから出た。

「今日は何処に行くの？」

朝食を食べながら、琴美は正一に訊いた。

「ああ。藤山の知り合いに会いにな」

「へえ。じゃ、さつさと支度しましょ。ごちそうさまでした」

「そつだな。ご馳走様」

二人して食器を片付けると、二階へ支度をしに行った。

「あれが確か待ち合わせ場所の公園だな」

公園が見えてきたので、足を速める。すると、藤山が待っていた。

「よう。待たせて悪かったな」

「そんなに待つてないよ。ささ、行こうぜ」

正一たちは、藤山の後をつけていった。

藤山の家についてしばらくすると、彼の携帯が鳴った。

「…もしもし。ああ、来たのね。じゃ早めに俺んちに来てくれ、も

う友達居るかな」

藤山はそう言って電話を切り、もう少しかかるみたいだ、と苦笑した。

しばらく談笑していると、急に家のインターホンが鳴った。

「お、来たみてえだな。ちよっと待ってる」

そう言って、藤山は玄関へと歩いていった。

「どうも初めまして、俺は大原正一だ。横にいるのが「神原琴美です」で、俺のいい…居候だ」

「へえ、居候なのか。俺は山沢古神^{やまざわいじん}」

「初めまして、私は神之宮巫女^{かみのみやみこ}だ」

実は、藤山は転校生である。話によると、中1まで、結構遠くの市に住んでいたのだが、親の都合でここに移り住んだらしい。昔の学校の同級生がこの二人で、今日は久し振りに家に誘ったそうだ。ついでに正一たちも呼んだようである。

「それにしても、ここは随分と都会なのだな」

「いや、ここは随分田舎のほうだと思うけどね」

すると神之宮はためいきをついて、

「一度うちの神社に来て、周りを見渡してみなさい。よくわかるから」

「行ってみたいわね、そういう長閑^{のどか}な所に」

その後、正一たちは一緒にゲームをやって親睦を深め合った。

「今日はどうもありがとう。二人ともとても気が合うよ」

「いやいや、こちらこそだ。私たちが随分楽しんだからな。久々に心からくつろいだよ」

「お前らまた来いよ。俺としても楽しかったよ」

藤山は満面の笑みで両方に言った。

「じゃ、俺らはもうそろそろ駅に行かにならんなのでな、じゃあな」
そう言つて、彼らは帰つていった。

「今日は楽しかったわ。来てよかった」

琴美は正一に、純粹な、笑みを向けたのだった。

「なら俺も良かったよ。さ、晩飯にするか」

二人は一緒に、帰宅の途へとついたのであった。

<閑話>友人の友人。(クロスオーバー)(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

うわー！グダグダですね。書いてから言えたもんじゃありませんが。実を言うと、以前にもこれを書いていたのですがデータがおじやんになってしまいました。本当はもうめんどくさくなっていたんですが、友人の強い要望にも押され、また書かせて頂きました。

神社の周りの風景などは全て脳内の妄想です。原作には一切出てきません。因みに、一応林になっているイメージで書きました。

ともあれ、原作者の友人、山口流氏には最大限の感謝を捧げます。では、また次回。

第10話 ループする景色と現代復帰（前書き）

放置しててすみませんでしたアーツ！！ あまりにも時間がなかつたんで…。

これからよろしくお願いします。

第10話 ループする景色と現代復帰

紅桜寺氏との戦いも終わり、正一たちは人が住んでそうな場所に行くまで歩いている…

……はずだった。

「あれ？なんかさつきから同じ場所行つてないか？」

そう。歩いていた先が森だったので、そのまま入ったのだが、さつきから、風景が同じ繰り返しなのである。

「ホントね、でも方向すらわからないわ…」

琴美も困惑しているようである。

どうやら、方向検知が使えないらしい。

「うーん…」

二人で如何にして前に進もうか考えていた。

その時。

ドンッ

「えっ？」

そう、背中を突き飛ばされたような感覚がしたのである。そして何故か体が重い。

だんだん、意識が微睡まひんでいく。

掠れていく森の景色。妙な落下感。

「あ…あ…」

そして、二人の視界は真っ暗になった。

「ふふふ。後何回かこういうことがあるのかしらね」

何か暖かい感じがして目を開けると、そこは知っている天井だった。

「あれ？ また か」

「やっと戻ってこれたのね…」

二人して背伸びし、起き上がる。

「さて、また明日の準備をしねえとな…」

「私は寝るわ」

かくして、正一たちはまた現代に戻ってきたのであった。

暗い蔵の中。少女が何かを探している。

「御祖父様から許可を取るのに、随分手間取ったわ…あれかしら？」

そして、ある棚の上にある木箱に目をつけた。

それを取り、開ける。

埃だらけの書物の中に、それは埋もれていた。

「…ふふ、あつたわ。やっと見つけた」

手にしたのは一見するとただのボロい本。

だが、それが少女が正に探していたものであった。

少女は喜ぶ。だが、彼女は、純粋な喜びだけでなく、

黒い感情をも含んだ笑みを浮かべた。

「ふふふふ…ふふふふ…ハッハッハッハッハア！！」

蔵の中に、狂気じみた笑い声が響き渡った。

第10話 ループする景色と現代復帰（後書き）

またもや現代入り。急展開過ぎましたね。
でもアレはどう見ても空k

「ネタバレ厳禁。しかも反省してないし…
一度吹っ飛びなさい」

ちよ、リラ、どっから来た？おい！？ちよ、ま…

……アッ！

「…ふう。作者に代わって私が説明するわ。

どうやら作者は、次回で猛烈に”あること”が書きたくて、
無理やり現代に戻したみたいね。

ホント、無理矢理にも程があるわ。

馬鹿よねえ。これだから低能はd「何が低能だー！！」

…懲りない奴。ちよっとOHANASHIしてくるわ。

ま、またどっかでお会いしましょう。またねっ！！」

ちよ、そんな物騒なもの、持つな！

俺はどっかの誰かみたいにな

崖を滑り落ちたりナタで脳天叩き割られる趣味はないn

「ドガッ ボカッ ガッシ ボカッ」

<ご察し下さい>！！や、やめろ、<伏せられました>！！
と、とりあえず次回まで待つてくれー、ギャー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4699v/>

無敵と魔術の物語 ~ Invincible Power and Formula Grimoire.

2011年11月13日21時54分発行